

地理学と言語—インタフェース、ルプレゼンタシオン、インターディシプリナリテ
—総括報告—

野澤秀樹

今回のシンポジウムはローザンヌ大学学際研究所 (IRI) およびクルト ベッシュ研究所 (IBK) の共同主催のもと、IBKのあるヴァレ州の州都シオンで行われた。クルト ベッシュ研究所は、実業家クルト ベッシュ氏の基金をもとに1995年大学をもたないこの州に設置されたもので、シオン市郊外りんご園の真っ只中に白亜の殿堂を構えている。IBKは、IRIと同じく^{インターディシプリナリテ}学際的研究、^{トランスディシプリナリテ}横断的研究を標榜した研究所で、後者と違い所長を除き研究者を擁してはいないが、さまざまな規模の会議室を備えた素晴らしい施設である。

今回のシンポジウムのテーマは、「地理学と言語^{ランゲージュ}—インタフェース、ルプレゼンタシオン、インターディシプリナリテ」であり、まさに両研究所に相応しいテーマである。IRIの所長を勤めていたいたジョルジュ ニコラ教授を主催者として組織されたものであり、表には全く明記されていないが、6月に退官された氏を記念する意味もあるのであろう。

標記のテーマのもとに3つのモジュールが設定された。第1のモジュール「地理学史とその言語^{ランゲージュ}」は、フランス国立科学センターのマリー クレール ロビック教授のもと6報告がなされた。第2モジュールはメインテーマと同じタイトルで、エクス マルセイユ大学ジャン ポール フェリエ教授の司会で、8報告を持った。第3のモジュールは 地元ローザンヌ大学言語学教授パトリック セリオ教授の司会で「^{ルプレゼンタシオン グラフィック}図的表現、言語^{ランゲージュ}および地理学」のテーマで7つの報告が行なわれた。2日目の午後は総合討論に充てられたので、1日半に21という盛りだくさんの発表報告が行われたことになる。この3つのモジュールはさして意味のあるものとは思われなかった。実際それぞれに分類された発表報告も厳密にモジュールのテーマに即したものではなかった。この分類はセッションを分けるための便宜的なものに過ぎなかったのであろう。従って今回のシンポジウムは、地理学と言語^{ランゲージュ}というきわて幅広いテーマについて、副題に掲げられたような視点から論じようとしたものといえるであろう。ここではすべての発表者についてそれぞれ論評する余裕をもたないので、全体としていくつかの傾向、あるいは特徴にとりまとめて、今回のシンポジウムの成果、問題点を検討してみたい。

発表者はすべてスイス、フランスからの出席者で占められ、ドイツ語圏、イタリア語圏からの参加者もフランス語で発表を行なった。スイス、フランス以外から5名の“外国人”が招待された。ルーマニアから数学、記号学者のソロモン マルクッス教授、イギリスからバーミンガム大のジョフリー パーカー教授、南米チリからベノス アイレス大のマルチェロ エクコラー教授、ナンシー大学所属であるが、ドイツ人のゲアハルト ミューラー教授と私の5人である。われわれに課せられた役割は、出版される報告書にそれぞれの国語で批判的な総括報告を書くことであった。

ところで地理学と言語^{ランゲージュ}に関するシンポジウムはこれまでも幾度か行われている。たとえばIGUの地理学思想史委員会でも類似のテーマが取り上げられ、日本でも同趣旨の研究グループが編成され、Langages, Paradigms and Schools in Geography (edited by Keiich Takeuchi, Laboratory of Social Geography, Hitotsubashi University, 1984)として報告されている。またフランス、スイス、イタリアの地理学者を中心に、空間の知覚、認知、表象の問題について1970年代以降継続してシンポジウムが催されてきた。中でも1987年ヴェネチアで開

催されたシンポジウムは、「地理的表象の言語」が主題とされた (Langages des représentations géographiques, Università degli Studi di Venezia, Dipartimento di Scienze Economiche, 1987)。その他にもあるであろう。今回のシンポジウムはこれら既往のシンポジウムと同じ問題関心に発するものと思われるが、それらとの関連については一切触れられ得ていない。今回のシンポジウムを特色づける上でも研究史的位置づけは必要であったのではないか。

上で今回のシンポジウムは、地理学と言^{ランガージュ}語という大きなテーマについて副題にあるような視点から問題とされたと述べた。副題の視点を、つぎのように3点に整理して今回のシンポジウムを総括してみたい。インターディシプリナリテ interdisciplinarié (学際性)、言語論的アプローチ approche linguistique、そしてルプレザンタシオン représentation (表象、表現) の3点である。

1) インターディシプリナリテ (学際性) 今回のシンポジウムの主催者、テーマから考えて「学際性」がもっとも重要なキーワードであったことは何人も異存のないところであろう。発表報告でもこの問題に言及したものが多し。なかでもニコール マチュー、ジャン フォグト、マドレーヌ ヒルシュ ジェンマ、ジャン フランソワ リシャール、シルヴィア オストロヴェトスキー、ピエール フレデリック ゴノ氏等の報告は、学際性が主題とされていたとあってよい。ただ学際性が主題となったシンポジウムではあったのだが、参加者のうち地理学以外では言語学のP. セリオ、社会学のS. オストロヴェトスキー、地域整備のP. F. ゴノ、ルーマニアのS. マルクッス氏の4名に過ぎずやや気がかりな点であった。

^{インターディシプリナリ}学際的な研究については、60年代からすでに議論が始まっており、いくつかの大学ではそのための研究施設も設置され、実際に優れた成果を上げてきている。いままた学際性とは何が問題なのか。近年では、さらに^{トランスディシプリナリ}横断的研究 transdisciplinarité ということもいわれる。本シンポジウムでもこの両者が問題とされたが、参加者の多くはそれぞれのディシプリンの自立性を尊重しながら、他分野との共同によって個別ディシプリンで得られる以上の方法、説明を追究しようとする前者の考えの立っていたと思われる。現在ではむしろ共通のアプローチの方法や説明モデルを追究していこうとする後者への主張が、ルーマニアのS. マルクッス氏が述べていたように、強くなっているように思われる。

地理学がもともと学際性の強い学問であることは地理学者共通の認識であるが、そのことが実際に他分野の研究者と学際的な共同研究を行なうときどうなのかが問題となる。今回のシンポジウムで学際性を論じた報告者は、それぞれに他分野との共同研究において良好な関係を維持され、大きな成果を上げられている。これは地理学者だけでなく、他分野からの参加者についてもいえることである。これら両者に共通していることは、それぞれ他分野のこと(概念その他)に深く精通していることである。このことは一見逆説的なようであるが、学際研究成功の理由のひとつであるように思われる。この点も含めて共同研究成功の理由は、研究者個人の資質によるものなのか、それともそれぞれの学問のディシプリンによるのか。前者によるところが多分にあると思われるが、学際研究はそれぞれ参加するディシプリン相互の共同によるところに意味があるのであって、個人間の問題に解消される問題ではない。そうであるとすれば、学際研究とは他分野と協力しうるだけの方法と概念装置を有していることが必要であろう。後者はまさに言^{ランガージュ}語の問題であるが、それについて十分討議されたようには思われなかった。ただ学際的な言語として「地図=図的表現」が議論されたが、第3の問題点として後述する。

2) 言語論的アプローチ 今回のシンポジウムのメインテーマ地理学と言^{ランガージュ}語には地理学の本質に関わる問題が内在する。ひとつは地理学における言語論的展開とも称しうるような地理学の認識論、方法論に関わる問題で

ある。哲学において言語論的展開がいわれて久しいが、地理学にも本格的に及んできた感がある。エクリチュールの分析、テキスト論的アプローチ、翻訳理論などの報告がそれである（フィリップ バシモン、オリヴィエ オラン、ヴァン ヴァルベク、ジャックリーヌ ガレルなど）。そのことを明示的に述べていない場合でも、それらの方法が用いられている（ロラン カリュプト、ポール マンヴィエルなど）。これらは地理学における思想史研究、認識論、方法論に批判と反省を迫ることになる。

エクリチュール、テキスト分析はルプレゼンタシオン（表象）の問題と深く関連する。ルプレゼンタシオンについては次項で取り上げるように、^{ルプレゼンタシオン グラフィック}図 的 表 現と密接に関係するが、哲学的な問題でもある。Ph. バシモン氏の報告、さらになお概念的曖昧さが指摘されたとしてもジャンポール ユベール氏のトポロジー等の問題提起は、主体、客体の関連を問う地理学における認識の問題が本格的に議論されようとしている。こうした若手の進出はこれからの地理学にとって大いに期待を抱かせるものがある。

表象の問題はまた、地理教育や地域整備などにおいて国土や地方をどのように取り上げるか、著者や為政者（地域整備者など）のそれらに対する表象と係わり、イデオロギーを含むきわめて重要な問題となる（ロラン カリュプト、ポール マンヴィエル、アラン ドゥ ラルプなど）。

3) ^{ルプレゼンタシオン グラフィック}図 的 表 現 ルプレゼンタシオンとは、表象とともに表現、描出を意味し地理学では^{ルプレゼンタシオン グラフィック}図 的 表 現＝地図を意味することが多い。「空間的なもの」を問題とする地理学は、それを表現する手段として地図を地理学に固有の言語と考えてきた。しかし、何人かの報告者が述べていたように地図の使用に関しては、いまや地理学独自のものではなくなっている。

地理学—表象—地図のトゥリニティが今回のシンポジウムの焦点にあった問題とってよいだろう。上に述べたように、前二者の問題に関しては、バシモン、ユベール、ドゥ ラルプらがの発表報告で主題的に取り上げられ、後二者については明示的に主題にされたとはいえないようだ。むしろ地図作成上の技術がコンピュータの発達によって著しく進歩したことから、地理学、地図とハイパーテキスト、マルチメディア等との関係が現実的な課題となっていることが指摘された（エルヴェ ガゼル、マドレーヌ グリスラン：セルジュ オルモー、ギアン パオロ トリチェリ等の報告）。

電子メディアが形成する空間を地理学としてどのように問題とするのかがまずもって問われなければならない。電子メディアによるGISに関しても、単なる技術の問題としてではなく、地理学、地理学言語の本質に関わる問題として検討しなければならないであろう。地図の表現能力は絶大である。空間の力、構造を表現する地図は、有力な地理学言語であることは疑いない（パトリック セリオなど）。それはまたイデオロギー性をもつものでもある（ミシェル シヴィニョン）。

本シンポジウムは地理学と言語というかなり大きな問題がテーマとされたが、ポイントは学際性にあったとってよい。現在地理学はさまざまなディシプリンから種々の言葉、概念を取り入れている。そのこと自体決して否定すべきことではない。しかし学際的な共同研究において、あるいは学問的分業において地理学が独自に寄与しうるのは、地理学から発する言葉（認識、方法を含んだ）であろう。今回のシンポジウムの主題において焦点となった地理学—表象—地図のトゥリニティは、地理学から発し、他分野に寄与しうる言語となであろうことを示した。なお検討すべき問題が残されてはいえ、すでにいくつかの具体的成果を上げており、それらをめぐって熱心で活発な議論が展開された今回のシンポジウムは、きわめて有意義な会合であった。